

徳島県下の学校誌

# 校誌の世界

平成9年1月28日(火)⇒5月5日(月)

休館日 毎週月曜日・毎月第3木曜日



展示図録目録用

## 徳島県立文書館

〒770 徳島市八万町向寺山 TEL 0886-68-3700





開拓(麻植中学)

昭和10年刊行の記念誌。麻植中学(現・川島高)の校友会誌は、「新興」「開拓」「あらたへ」と誌名を変えている。現在の校誌名は「あらたえ」である。



うずのあや(8号)(撫養高女渦潮会)

同じ校友会誌でも、女学校のはずっと優しい。誌面構成もソフトな感じだし、各項目の名づけ方を見ても、「後彫」の場合、卒業生の手記は「常盤の松」、在校生の記事は「若葉の緑」、先生方の動静欄は「花紅葉」といったくあいに優雅な名がつけられていて、男女別学時代の雰囲気の違いは鮮明である。



後彫(19号)(徳島高女済美会)



会誌(24号)

昭和に入ると表紙が一変する。白地に墨一色のものから、絵が入り、色がつくようになってくる。だが、本文は依然として活字ばかりの二段組みというジミな編集である。それでも徐々に読ませるための工夫がなされるようになる。写真が5、6葉にふえ、「芳越」のように生徒のカットが入るようになる。次は「渦の音」43号の編集後記の一節である。「渦の音」はわれらの会誌だ一という強い意識の下に出来るだけ親しいものに、出来るだけ清新なものにと専念した。「渦の音」は我々の生活感情の発表機関だ。



芳越(24号)



渦の音(43号)

## 変

富岡中学の「校友会雑誌」は、39年の創刊。A5判一七二ページ。扉には職員・卒業生の集合写真が入っています。「渦の音」や「芳越」と違って固有の名を持たず、以後もずっと「会報」「会誌」という名称で通しています。この三誌、それぞれに多少の違いはあっても、形式・内容ともに驚くほど似通っています。その後県内で出された各校の会誌も、他府県のものも、みな同じ傾向です。そればかりか、専門学校、旧制高校、大学予科といった上級諸学校の校友会誌も同様の型をもつものでした。この活字ばかりで埋めつくされたパンカラ編集は、昭和初期までつづきます。

革の動きが見られるのは、昭和6年ごろからです。「渦の音」No.43(昭和6)は、目次に工夫が凝らされ泥臭さのないスッキリしたものです。在校生名簿が初めて加わり、編集ぶりにも随所にしゃれた感覚がうかがえます。富岡中学の「会誌」第24号(昭和7)は絵の表紙になり、初めて巻頭之言が加わっています。最も個性的なのは「芳越」第28号(昭和8)で、記事中に写真が入り、生徒の描いたカットがちりばめら

## 旧

制脇町中学(現・脇町高)、富岡中学(現・富西高)は明治29年に徳島中学の分校として設置され、32年4月、分離して独立の中学となりました。脇町中学芳越同窓会の機関誌「芳越」は、34年に発刊されています。A5判八六ページ。「会員の練文場」「文筆研磨の機関」を謳った文芸色の濃いものです。

その創刊号で、賛成会員の猪口繁太郎先生は、「会員相互の気脈を通ずる伝令として其名も高き阿波の鳴門なる渦の音と云ふ雑誌の発行を見るを得るは、余等の最も喜ぶ所なり」と述べ、今後は我が中学生諸子と校友の諸氏は、本誌を以てその連鎖として、大いに団結心を強固にしてほしいと結んでいます。A5判、一一九ページ。写真もカットもない、全ページ活字ばかりの雑誌です。内容を見ますと、分量的に一番多いのは詞藻(作文・漢詩・短歌・俳句)ですが、修学旅行、先輩の便り、図書館といった現在の校誌的なものと、本校の現況、校友会の沿革・役員のような学校要覧的なものが網羅された幅広い内容の総合雑誌になっています。

## 校

校友会誌時代の中身を少しのぞいてみましょう。まずあげるのは、富岡中学「校友会雑誌」創刊号(明治39)に載せられた作文です。秋の野辺 第五年級 内藤永二

### 秋の野辺

第五年級 内藤永二

物のあはれは、秋こそ、まされと、誰かは、云ひそめけむ、夕陽、西に、うすすきて、馬子唄の声、かすかに、あなたの森の中に、消え行きつ。夜嵐、いとど身にしみて、過ぎにし方、行くさきの、事ども、何くれとなく思ひつづけつつ、只独り、日ぐらし硯に、むかひつる、つれづれ慰めましと、宿を立ち出て、そこはかとなく、逍遙す。雲の行きかひ、ただならぬに、入相の鐘、無常の声を、伝へて、やうやうにくれ行く、さみしさを、げに思ふ事なげに、家路にいそぐ、田びと等が、おのがじし、声高に、云ひかはしつつ、過ぎ行きし後、あたりは、人の声だになし。(略)

このあと、白菊を手にした少女が涙ながらに亡き人の墓を訪うさまが描かれます。古典の名文句を綴り合わせたパロディのような不思議な文体です。当時は一六歳の少年でも、古文を完全に自分のものにしていたことが分かります。次は、「渦の音」43号(昭和6)のものです。

### メダル賞 戦争 五ノ一

都 文雄

(略)世界は一大同胞だ。神の意志の下に連る友だ。しかし我等人類は国民である以前に、人類と云ふ同胞ではなかつたか。げに戦は人類にとつて呪ふべき癌だ。平和なる世界の建設を翹望し、共に世界文化の樹立を叫ぶ時は、この世界から戦争を除去した場合のみ可能ではなからうか。(略)



今回、徳島県下の高等学校等で刊行されている「校誌」など学校関係刊行物を、行政資料（行政刊行物）として展示することにいたしました。

「学校」関係資料と「行政」資料は、無関係に思えるかも知れませんが、文書館では、県・市町村やそれらが設置する機関・施設（行政）が発行する刊行物を「行政資料」として収集の対象としています。校誌は、先生（教育公務員）が校務（公務）として編集に携わっていたり、何らかの形で「公」行政が関与しているからです。

徳島県の多くの高等学校・県立学校で毎年発行している校誌のような定期刊行物は、他府県にはほとんど例がなく、全国的に見ても特色のある刊行物であります。

全国的に珍しいというだけでなく、編集や取材において協力しあったり、分担したりして、先生と生徒がともに携わっているということも特筆すべきであります。また内容的には、一年間の学校行事全体や生徒の動きが職員や生徒の生の声や写真を通して伝わってきます。

教育の危機の叫ばれる昨今、教職員と生徒の接点の場としても見直すべき貴重な「教育の場」のひとつと言えるでしょう。

今回の展示が「徳島の校誌」の独自性や、これを育て続けた本県の教育環境を見直していただく機会になればと念じております。

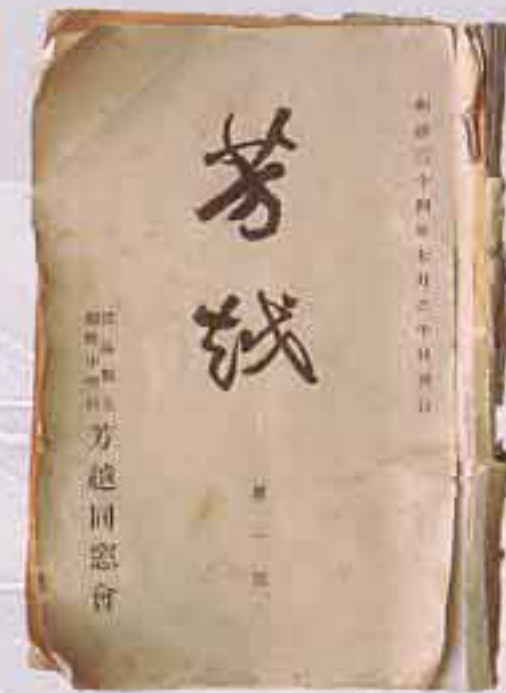
本展示において、外部の方の強力なご協力をいただくことができました。校誌の編集に不届の工夫と試みを重ね、常に新鮮な「型」を提示して県の校誌をリードしてきた板羽淳先生、従来文章の添え物であった写真を活用して、読むだけの校誌から感動を伝えるドキュメントへの道を開かれた増田清次先生のお二方であります。両先生には企画の段階から、取材、図録の原稿、写真等に至るまで大変お世話になりました。

またアンケート等でご協力をいただいた県下の高校の関係者の方々、特に資料借用や取材に快くご協力いただいた城南、徳島商業、富岡西、富岡東、脇町、城ノ内の各校及び県立図書館などの皆さん方には大変お世話になりました。改めてお礼を申し上げます。

徳島県立文書館長 大 和 武 生



渦の音(創刊号)



芳越(創刊号)



校友会雑誌(創刊号)

### 徳

島には県下一円にあって、しかも徳島にしかないもの、そんなものはそう多くはないでしょう。校誌と呼ばれる学校誌はその一つなのです。現在、徳島には四六の公立高校がありますが、そのうちの三九校で、一一の分校でも九校がそれぞれ独自の校誌を発行しています。これほどレベルが高くて内容豊富な雑誌を、これほど多い学校が毎年継続して出している都道府県は全国どこにもありません。「校誌」という言葉すらないのです。なぜ、徳島にだけこのような独特の文化が築かれているのでしょうか。ここでは、過去の足跡をたどるとともに、その原因をさぐってみたいと思います。

### 戦

前は、全国各地の旧制中等学校、高等女学校で校友会誌、同窓会誌が発行されていました。

徳島の場合、旧制徳島中学(現・城南高)の「渦の音」がその最初で、発行は一九世紀最後の年、明治33年(1900)12月25日のことでした。徳中の母胎は、明治8年11月に出来た名東県師範学校附属変則中学ですから、ちょうど四半世紀後に創刊されたこととなります。徳中同志会の機関誌でした。同志会とは、それまでにあった校友会(同窓会的なもの)と運動会(体育会兼生徒会)とが合併してできたもので、通常会員(在校生)、特別会員(卒業生)、賛成会員(教職員)の三者からなるものでした。

# とくしま 校誌物語

板羽 淳





青藍(創刊号)

学校の年齢と校誌のバックナンバーが一致しているのは、徳島市立と城ノ内の二校である。来年度からは新設の徳島北高の校誌が仲間入りするはず。どんな校誌が作られるか、楽しみである。



北極星(創刊号)

「北極星」は昭和46年度の「三十周年記念号」ののち二年間の空白を経て、第2号を昭和49年度に出している。「渭山」は「七十周年記念誌」を第1号とし、翌年号を2号として以後毎年刊行した。このことは重要である。記念号だけでストップしなかったことで、総選4校の校誌が揃った。これが県内校誌の隆盛の因となったのである。



渭山(七十周年記念誌)



葦芽(7号)

創刊号は、「渦の音」を分析し、「市高誕生」(36ページ)という特集以外は、同じ形式、同じ割合で作られている。7号から大判になった。紙質を良くし、写真を多く大きく扱うことにより、今の生徒の興味をつなぎ止め、さらに将来に向かって、文字と写真の相乗効果によって、その「時代の空気」を記録しよう、生きた化石として封じ込めようと試みたのである。



葦芽(創刊号)

なものを踏まえながら相互に影響し合って、徳島の高校校誌独特の型を形成していくこととなります。「校誌の誕生」です。徳島市立の「葦芽」(37年度創刊)は、「渦の音」の引き写しからスタートしましたが、その後、新聞切り抜き帳、学級日誌抄、新任職員ふるふいる、各課のページ、マイホーム・アワホーム(クラス紹介)、一・二年生名簿といった「渦の音」になかった独自の企画を加えていきました。

## 校

誌刊行の意義は、大きくとらえて二つあります。

ひとつは、その年度の学校の記録を残すことです。活字によるにせよ、映像の形をとるにせよ、数字で示すにせよ、出版されたものは、五〇年後百年後の貴重な史料となります。平成の私たちが会誌を読む時、あたかもその時代の空気を呼吸しているかのように、明治の中学生、戦時中の中学校の姿が蘇ってきます。それは現在形で書かれた歴史書であると言つてよいでしょう。一冊一冊が学校の年輪を刻んでいるのです。その意味で、絶やさずに毎年出すことがまず大切です。大戦末期から戦後しばらくまで、学校誌が消えてしまったあ

## 今

各校の校誌は、内容的に見ると「渦の音」と「葦芽」をミックスした形、すなわち、巻頭言、巻頭エッセイ、学校行事(学校祭、遠征記、修学旅行など)、部活動、必修クラブ、生徒作品集、校務分掌、就職進学一覽、先輩からの便り、新赴任先生の紹介、卒業生在校生名簿、職員録、教務日誌抄、カラーページといったものから成っています。

編集の面から見ると、各校の校誌は二つの型に分けることができます。A5の「渦の音型」とB5の「葦芽型」です。これは、活字路線(読ませるもの)と映像路線(見せるもの)と呼んでもよいでしょう。

「葦芽」第7号(43年度)は、大きさをA5判(教科書判)からB5判(週刊誌判)に変えました。大きさは編集方法に関わってきます。写真とイラストを多く入れて、広い誌面をレイアウトすることによって「見る雑誌」への脱皮を計ったのです。このB5判は、城ノ内の「青藍」(55年創立の年に創刊)や、鳴門の「潮流」(横書き方式のユニークなもの)など、次第にふえて現在では約四割の校誌がこの判を採用しています。時代の要請でしょうか。

の不孝な時代は二度と繰り返したくないものです。

もうひとつの意義は、現在いる生徒の所属感を醸成するということ。ここが私の学校なんだ、母校なんだという思いを強くさせることです。

校誌の名簿には必ず自分の名前が記されています。自分や仲間達の文や写真が載っているまざれもない自分たちの雑誌、ほかのどんな書物にもない愛着と誇りが感じられる存在です。現在、大方の学校では合格者召集日に前年度の校誌を配布しています。これは、入学前の生徒に高校生活とはどういふものかを知らせるオリエンテーションの役割を果たし、不安を希望に変える効用があります。

新入生を含めて生徒一人ひとりの心が求心的に学校に向かうようになる、その媒介となるのが校誌なのです。

文書館のきもいり、平成元年3月から県下一斉の校誌交換の場が設けられることになり、おかげで送付の費用と手間が省けるようになりました。同時にそれは切磋琢磨の機会をも与えてくれました。互いにみがき合せてそれぞれがよい本を作り、「日本唯一の校誌県とくしま」のレベルはますます上がつていくことでしょう。

## 最

後をお願い。どこかに埋もれて眠っているはずの戦前の会誌をぜひ県民の手で探し出して下さい。

「渦の音」は城南創立百周年の記念行事の一つとして、すべてマイクロフィルムに収められ、実物は五、六冊ずつ合本されて図書館に保管されています。ところが同志会誌時代の五、四号中に欠本が一冊もあります。「芳越」は校門脇の芳越歴史館のガラスケースに一冊ずつ納められていますが、こちらも三七号中に五つの欠本があります。他校の場合も事情は同じでしょう。県立図書館にある旧中等学校・旧高等女学校の会誌は、わずか一七部に過ぎません。探し出されるのを待っている会誌が県下には何冊も何十冊もあることでしょう。何とか今のうちに揃えたい、欠けた鎖を連結させて、それぞれが一そう輝きを持つようにしたいものだと思います。

(昨年、芭蕉自筆の「奥の細道」が発見されました。元禄のものでさえ出現する時代なのですから)





渦の音(復刊号)

発行数千五百部。業者3社が入札し、落札価格は4万5千円であった。編集部自作のアフォーリズム、クロスワード・パズルなど、遊びの要素が加わっている点が、旧校友会誌と違っている。



渦の音(54号)

徳島商業の「校友会誌」第35号は昭和15年度のもので「二千六百年記念号」と銘打たれている。翌年の第36号は「振励」という誌名に変わっている。この時徳商では、旧校友会は、すでに昭和14年全国的に結成されていた「学徒振励隊」に改組されていたのである。「振励隊」の名称は、「青少年学徒二賜ハリタル勅語」(昭14)の結び「文ヲ修メ武ヲ練リ質実剛健ノ気風ヲ振励シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ」からとられた。「渦の音」54号も、前年までの同志会にかわって「振励隊」がその編集発行者になっている。用紙は粗悪なザラ紙である。



振励(36号)



渦の音(51号)



渦の音(50号)



芳越(35号)

昭和10年代になると、本文中にも軍人による時局講演会がふえ、次第に戦時色を色濃くしていく。表紙を見ても、勤労奉仕、軍事教練、ゲートル姿の行軍のさまなどが描かれるようになる。ただ生徒の作文に、まだまだ浪漫的な叙情や、柔らかな感受性がうかがえるのが救いである。

刻々として歴史は流れて行く、悠久なる将来に、嘗つて人類のたどりきた惨ましき頁が繰返へされないと誰が保証し得ようぞ。ああ、無理非道な戦が過去の夢として、この地上からのぞかれ、世界の人々が嬉々として楽園の如く生を楽しむのは果して何日の日か。

ここでは約八分の一をあげました。昭和6年という年は、あの一五年戦争の始まりの年です。その年にこのような平和賛歌が書かれ、それにメダルが与えられていたのです。

だが、大日本帝国はこのような願いとはうらはらな道をたどり、すべては否応なしに戦時体制に組み入れられていきました。

次にあげるのは、「渦の音」第54号(最終号)にある「年間行事」昭和18年1月の記録です。

一日(木) 午前九時ヨリ新年拝賀式ヲ挙行、式後戦勝祈願ノタメ忌部神社ニ参拝

八日(木) 大詔奉戴日ニツキ詔書捧読訓話、始業式三年以下ハ課題考査、四年ハ三十三部隊観兵式ニ参列、五年ハ午前中授業、午後四、五年実力考査(数学、九日

国漢、十日英語)

十日(土) 本日ヨリ一週間武道寒稽古

廿二日(木) 青少年学徒二賜ハリタル勅語捧読式

廿七日(火) 稲垣先生御入営ノタメ送別式

卅日(金) 教練査閲

卅一日(土) 故陸軍大尉美野信次郎先生英霊弔迎

これを見るだけでも、戦時下の中学校の姿が浮かび上がって来て、事実の記録の持つ迫力に圧倒される思いがします。

昭和18年、戦争遂行に直接関係のない部門への用紙の配給がストップされ、全国各地で発行されていた会誌はこの年を最後に、一斉に姿を消してしまいました。そして、徳島以外では再び陽の目を見ることはなかったのです。

### 長

空白ののちに、会誌的な雑誌が復活したのは十年後の昭和29年城南高校の「渦の音」復刊号からでした。30年11月の「旧徳中・城南創立八十周年」記念行事の一環で、行事総予算一千万円の寄付集めの手土産ともするため、一年早く復刊したのです。

復刊号(二三〇ページ)の内容は、河野健二氏や伊原宇三郎画伯ら卒業生二〇名の寄稿文、クラブ活動、文・体祭(現在の城南祭)、旅行記、進学状況、学校日誌抄、それに約20%を占める文芸欄などで、項目別の分量の割合は会誌時代とほぼ似通ったものでした。

翌年には八十周年記念号、つづいて復刊第三号と、以後毎年発行されていきました。——これはとても大きな意味のあることです。なぜなら、他府県の場合、創立〇〇周年記念号という形で復活させることはあっても、毎年定期的に刊行されることはなかったからです。

その後「渦の音」は時代に合わせて次第に洗練の度を加えていきました。復刊七号になると、会誌時代にはなかった新しい芽が出て来ます。文藝春秋式の巻頭エッセイ、「青春の宴」ファイアーストームのような特集、学園便り、社会時評、「城南撮影所繁笑記」のような学校生活に根ざした戯文漫文のページなどが加わっていったのです。

### 呼

び名としての校誌が初めて登場したのは昭和37年のことでした。徳島市立高校では創立の年に学校誌を創刊しようということになり、誌名を生徒から募集しました。その際「わが輩は校誌である。名前はまたない」という書き出しで「誌名募集について」のガリ版刷りのプリントを配布しています。その後、昭和40年代は「校誌」と「校友会誌」の二つが並行して使われていましたが、50年代になると「校誌」一本にとまるようになります。現在の高校に校友会がないということが理由のひとつ、もうひとつは、多くの学校でそれぞれの学校誌が発行されるようになると、固有名詞だけではなくそれらを通じて使える普通名詞が必要になってきたからです。その背景には次のような事情がありました。

### 総

合選抜制度が徳島市内普通科四校で実施されたのは昭和47年度のことでした。城東の「滑山」1号(70周年記念号)が出された年です。前年創刊の城北「北極星」と合わせて、これで市内四校すべてが校誌を持つことになりました。このあと右へならえの形で50年代半ばまでの七年間に、一五誌が創刊・復刊されて、校誌の数は倍増していったのです。各誌はすでにそれまでに出来上がっていた校誌の原形のように



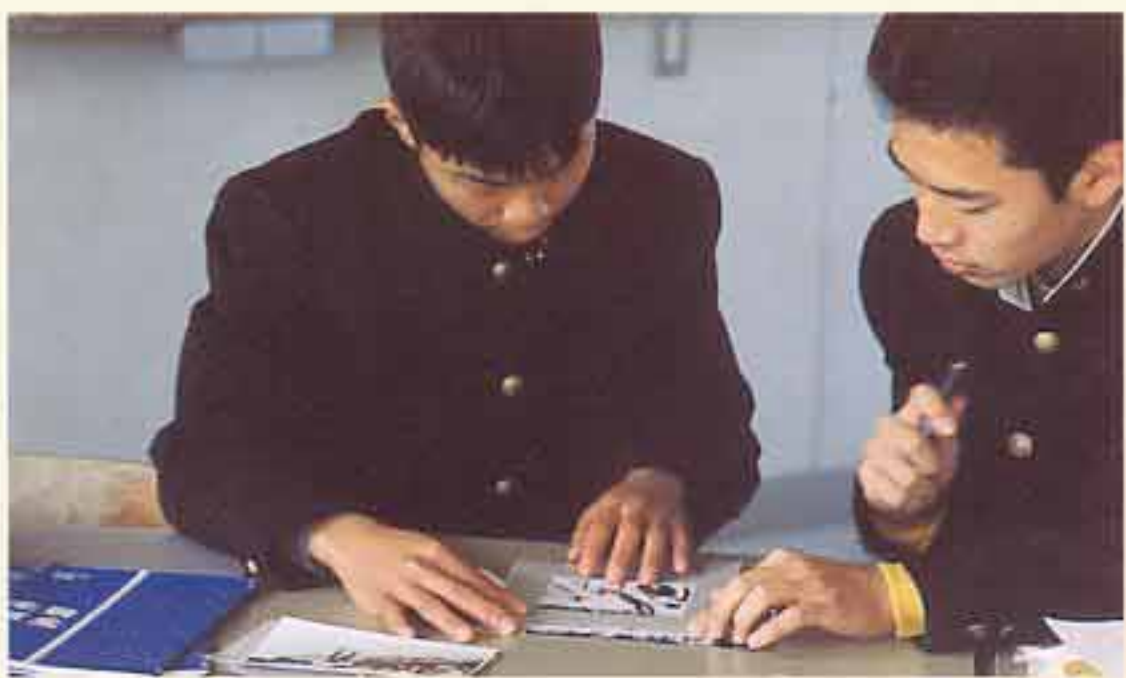


写真2



写真1

表2 台割り表

17	◇	1	もくじ
19	◇	2	カラード グラフ
21	◇	4	泊訓練 集団宿
23	◇	6	就学旅行
25	◇	8	文化活動
27	◇	10	学園生活 アラカルト
29	←21行 エッセイ	12	富東祭 第41回
31	◇	14	◇
	◇	16	◇
	◇	32	◇

表1 企画表

特別活動 部活動	生徒会		項目	
	必修クラブ	生徒会		
一覧表(顧問名・部長名・男女別人数・部費) A 活動内容・成績(統一をとること) B 部長の反省・抱負(14字×6行以内、文をひきしめる。ガンバル・一生命命は禁句) C 顧問所感(3行以内、昨年は部のモットー、一昨年は顧問素描) ●文化部を充実させること。美書演・放・珠算・簿記・タイブ・生物など ●すべての部の日常の生きた写真をできるだけだけ集めること。 ●県高校総体30回の上位校一覧(女子)・本年度成績・得点一覧(男・女)	生徒総会(議題・討議内容・結論) 週番活動(週目標・反省点など) 日常活動・各種委員会活動・リーダー研修・新旧役員一覧・役員手記 一覧表(活動内容のネーミング・紹介文に工夫・レイアウトに変化を)	9 五段 A 1月	4 四段 B 12月	頁数 組 分担 締切 備考 顧問の認め印、 またはサイン エッセイ二つ抱 きこむ

初校は念入りにやる。  
 コピーを二枚とり、別々の委員がそれぞれに校正したものを参考に、班の先生が一枚にまとめて、編集長を通じて送り返す。  
 指定どおりになっているか。文字の大きさや位置に不統一はないか。一字一字押さえるように丹念にやる。原稿自体に誤りがあると思われる場合には、筆者に問い合わせ確認をとる。いちばん間違いやすく、しかも絶

対に間違えてならないのは、固有名詞(とくに人名)、数字(とくにケタ)の二つである。再校を経て、責了となる。  
 最終的に青焼きで確認する。これは写真の位置や裏焼きになっていないかを見るぐらいで、よほどのことがない限り文字は直さない。  
 三月 発行、配布、発送  
 第一回校誌交換会は、平成二年三月二十日に開かれ、すでに八回に及んだ。県下各高校

はもちろん、県立図書館、文書館、研修センターにも一括納入できるようにしている。ほかに送るべきところは、国立国会図書館、逐次刊行物部、地元市町村の図書館、公民館、関係中学校、自校の図書室などである。執筆して下さった方にはお礼状を添えてお送りする。  
 卒業生、在校生のほか、新入生にも合格者招集日に配布する。新入生にとって校誌は、高校

生活を知るための絶好のガイドブックになる。かくして校誌の一年は暮れる。  
 ここで注意しておかなければならないのは、「校誌年度」とは、前年度の二月からその年度の一月末までと考えることである。そうしないと、二、三月の記事が脱落して一年一二月を丸ごと納めることができなくなり、歴史の史料としての価値は半減するからである。



「潮流」



「唐梅」



# 校誌の一年

雑誌の一般的定義は、

「一定の編集方針のもとに、いろいろの原稿を集め、週以上の間隔で定期的に刊行されるもの」である。

マガジンのもともとの意味は「倉庫」だといふ。校誌は原則として年刊。その倉庫の中に納められるのは、一年間の記録である。学校一年の歩みの中で、何を、どういう形で残すか、それぞれの学校独自の編集方針のもとに、編集作業は行われている。四八の校誌があれば、四八通りの方針と作業法があるだろう。ここでは、生徒委員が編集に参加している学校の一年を追うことにする。

## 四月 組織づくり

新年度のスタートと同時に、職員員の編集委員は任命される。校務分掌に関係なく、独立した編集委員会を組織する学校が多い。責任者(編集長)一名のほか、委員数は八〜一〇名程度である。

## 五月 企画立案

編集長を中心に、その号の編集基本方針、ページ数、印刷会社、費用などの案を決め、職員会議の承認を得る。

つづいて、公募または指名によって生徒委員が決められる。委員数は一、二年生、一〇〜二〇名の学校が多い。

生徒委員はただちに、先生の指導によって編集の勉強に入る。委員の仕事、編集の手順、校正記号、委員としての心構えなどである。

## 七月 分担決定

職員・生徒合同の企画編集会議を行う。全員が顔を合わせるの一回だけで、あとは編集長と連絡をとりながら班ごとに作業を進めていく。

班は、職員二名、生徒六名程度の単位で、

A・B・Cの三班にするのが動き易くて良い。写真班は活字班とは別箇に組織される。

今後の活動の指標となるのが、表1でその一部をあげた企画表である。これは特別活動の中の一部であるが、それ以外の項と目を挙げる(カッコ内が目当たるものである)。

巻頭(巻頭のことば・校長先生)

特別活動(ほかに遠征記)

ホームルーム(クラス紹介)

学校行事(前年度の卒業式、入学式、学校祭、修学旅行、宿泊集団訓練、

前年度の予餞会)

グラフ(カラー、モノクロ)

記録(教務日記抄、学級日誌抄、校務分掌、

新聞切り抜き)

文化活動(生徒作品集、家庭クラブ)

職員(新任紹介、エッセイ、訪問記)

進路(前年度卒業生進路一覽表)

涉外(同窓のページ、PTAのページ)

名簿(一・二年生名簿、卒業生名簿、職員録)

特集(タイムリーなテーマで)

それぞれに、内容、割当ページ数、分担班名、締め切り、注意事項などが示されている。

(企画表は編集長が作成する)

各班はこの企画表に示されたラインに従って編集活動に入る。各班にはある程度の競争心が生まれてくる。分担箇所に関してそれぞれが、食材を選び、調理し、味付けし、盛り付けを考えて、おいしく読んでいただくための誌面づくりの工夫をするのである。

夏休みごろから、取材、原稿依頼、原稿募集、インタビュー、座談会準備などの活動が開始される。

## 九月 編集作業

原稿、写真、イラストが揃うと、仕上がり印刷物と同じ寸法の割り付け用紙を使って、誌面構成、レイアウトに入る。委員たちの創

意工夫が最大限に発揮される場である。

先生の助言のもと、文字指定、写真、図版の位置、形、大きさの指定をしながら行数を計算して赤ペンで線を引き、割り付けていく。(写真1)

例えば、見出しの場合。

読者を引きつけるため、どんな文句にするか。どこに置くか。タテかヨコか。一本にするか二行にするか。文字は手書き(デザイン文字、筆文字)か、活字か。活字の大きさはどうするか。字体は、明朝、ゴシック、楷書体、ナール、ゴナ、ヒゲ文字などのどれを選ぶか。写真とどう組み合わせるか。墨のせか、白ヌキか。ケイは、地紋は……。メーカーの見本帳(印刷会社から手に入れる)と首つびきで記事内容、項目にふさわしいものを模索するのである。

映像による記録としての写真の場合。

文章はあとで思い出して書くことができるが、写真はその一瞬一瞬が勝負である。そこで写真班は、合格発表から卒業式まで、あらゆる行事、あらゆる学校生活の生きた姿を撮っていく目配りが必要とする。

並んで正面を向いた集合写真ばかりではなく、動きのあるスナップを撮るよう心がける。カメラ目線のピースサインなどは一冊に一枚ぐらいにとどめる。

カラーページ用にはカラーリバーサル(スライド)を、白黒写真用にはやはりモノクロフィルムを使った方がシャープになる。(校誌用には普通のカラープリントフィルムは不必要である)

文字班の要望に応じて、適切なものを提供する。

誌面構成の上で、写真をどう扱うかがその班の腕の見せどころとなる。同じ形、同じ大きさのものばかりではおもしろくない。その

ために、大きめに焼いた写真に、L字型のトリミングマスクを使って一番良い構図を選んでトリミングする。(写真2)構図が決まれば、上にトレーシングペーパーをかぶせて、写真を傷つけぬよう青鉛筆か3Bの鉛筆で線を引く、トリミングと実際の大きさ(三分の二ぐらいの縮小が望ましい)を指定する。

形は四対三の矩形ばかりでは平凡になる。適当に縦位置のものやワイドのものや切り抜き版など、内容に応じて工夫する。(同じ顔写真でも、正方形、矩形、楕円形ではそれぞれに違った印象のものになる)

方向性のある図柄の場合は、力の向きが誌面の中央にくるように置く。

できるだけ写真説明をつける。

さて、その他もろもろの作業が終わると、いよいよ印刷会社に送られる。

## 十一月 入稿開始

出来上がった項目ごとに、原稿、写真、レタリング、イラスト、図表に、レイアウト用紙を揃える。原稿とレイアウト用紙の双方に赤字の指定ができていくかどうかを確認し、責任者を通して印刷会社に送る。

その頃には編集長の手によって表2のような台割り表が出来上がっている。これは富岡東高の「唐梅」のもので、欄外にCとあるのは、カラーページである。

出稿したページは赤でふちどる。初校が終われば青で対角線を引く。責了になると、青で塗りつぶす。一六ページ(二台)分全部が塗りつぶされた台から、ページの順に関係なく印刷にかかる。

## 十二月 校正開始

ゲラ刷りが来たらいよいよ最後の作業、校正の始まりである。これはJISの校正記号表に従って、赤字で行う。時間に追われて苦しいが、仕上げの重要な作業である。とくに



# 徳島県内の高校校誌の現状

## 校誌アンケート調査より

校誌展に先立ち、県内の高校にアンケートをおこないました。  
回答結果にもとづいて「校誌」の現状をまとめておきます。

### 1、校誌発行状況

公立学校 本校39誌(46校中)

分校7誌(11分校中)

「日本唯一の校誌県とくしま」といわれるように、県内の公立高校(障害児諸学校を含む)において校誌はほとんどの学校で刊行されています。

校誌は刊行されていなくても、各学校では創立記念として二十五年、五十年、百年など節目の年に記念誌が刊行されています。分校や障害児諸学校などでは、卒業記念の文集や文芸作品を中心に編さんされており、「校誌」のはじまりが文芸誌や校友会誌であったことを考えると校誌といっても形態としては幅広く多様なものがあります。校誌名には、各校の所在する地域名や学校のシンボル等が採用されています。

内容的には、どの校誌も精密の差はあれ一年間の各学校の学校行事や生徒の活動、組織・分掌などを網羅してまとめており、貴重な学校教育活動の公的記録となっています。

編集体制も編集委員会が組織され、10校において教職員の校務分掌の中に位置づけられています。生徒も公募や指名により編集になんらかの形で参加しているところが多く、5校においては必修クラブの中に位置づけています。

総経費も200万円から10万円まで学校により差はありますが、平均89万円。生徒から約1000円前後の徴収をおこなっています。

### 2、創刊年度・刊行巻数

明治33年、旧制徳島中学校(現城南)で発行された「渦の音」が県内では最初の「校誌」の先駆的雑誌です。他の旧制中学・女学校・師範・専門学校などでも校友会誌・同窓会誌・文芸誌などの形で発行されていました。

第二次大戦中中断されていた「校誌」は、戦後の教育改革にもなう新制高校の発足にともない復活しました。当初は文芸部誌や生徒会誌などの形をとっていました。昭和29年城南高校「渦の音」の復刊を皮切りに、各校で次々刊行されていきました。しかし創刊されても休刊したり、復刊しても再度休刊となったりで、毎年刊行が軌道にのるためには時間を要したため、創刊年の確定は複雑で難しいものがあります。本館や図書館に残る創刊号をもとにしましたが、創刊号のない場合はアンケートなどを参考に推定しました。

現在までの刊行巻数は、68号「たくみ」(徳島工業)、59号「芳越」(協町、戦前からの通巻)から創刊間もない2号「鈴が峰」まで、平均巻数は25巻です。

### 3、体裁・表紙

A5判(教科書サイズ) 20誌

B5判(週刊誌サイズ) 24誌

「渦の音」に代表されるA5判の「文藝春秋」的読み物スタイルから、「葦芽」「青藍」に代表される写真や図版をふんだんに使ったグラフィック的な編集スタイルまであります。

横組は4誌のみで、縦組が大多数です。縦3段組、週刊誌サイズが多くなっています。表紙は写真と絵が相半ばして拮抗しています。

総頁数は最大300頁から手づくりで10頁のものまでさまざまです。平均は112頁。カラー頁は16誌が採用、平均16頁です。

### 4、悩み・問題点(アンケート回答より)

● 予算に限りがあるので、ページ数が制限されてしまう。

● クラブ活動に校誌編集クラブがとり入れられ、位置づけられてはいるが、編集等に莫大な時間がかかり作業が夕刻過ぎまで続く日が続く。

● 「編集」が余分な仕事と見られがちで、協力してもらうのに苦労する。それだけ校内の雑事が多くなっていることかも知れません。

● 生徒数の減少に伴い、生徒一人一人の負担が高くなっていくことが悩みである。

● 多忙の中での編集であること。

● 編集委員各々が多くの仕事をかけ持ちしているため、編集委員会を開くこともままにならないという現状である。

● 紋切型の編集方針になってしまい、内容の独創性にかける。

● 校誌に取り組む時間的余裕がほしい。

● 生徒の自主的参加の方法を考えている。

● 生徒徴収金以外、経費の裏付けがない。

● 校誌は3年に一度発刊することにする。

● 編集委員生徒の数が減少し、主体的・自主的な編集活動が困難になって来ている。さまざまな要因が考えられるが、「校誌」の性格・役割について、一度見直す時期にきているのかも知れない。

● 全校生徒数が少ないので、原稿を一人が複数書かなければならない。

● 記録としての性質を損なうことなく、その年その年の特色をどう出すかが難しい。

● 小規模校なので、生徒数減、編集スタッフ不足、予算不足等で悩んでいる。

● 校務分掌外に編集長が学校側より任命され、編集委員は編集長指名。皆、余分の仕事という意識があつてか、或いは忙しいからか、仕事はなかなかかはかどらず、卒業式の日と競争で、毎年命の縮む思いがする。

● 特集が悩みの種、特集を組まなければ仕事は楽だと思いが、またその特集がその本の顔。

### 【感想】

アンケートを読ませていただき、現場の担当者のご苦労が伝わってきます。どちらかといえば、現在の学校教育現場の中では「不急のもの」と思われがちですが、学校の歴史を残す重要な教育活動です。「校誌」の発展継続を願っています。



# 徳島県

# 校誌一覽表

No.	学校名	校誌名(ふりがな)	創刊年度	復刊年度	最新刊行号 刊行年度(西暦)	体			裁	
						判	組	頁数	カラー	表紙
1	城東	渭山(いざん)	S47		24号(95)	A5判	縦組(3)	186	2	写真
2	城東北島	きたじま	S49		22号(95)	A5判	縦組(3,4)	73	1	絵
3	城南	渦の音(うずのおと)	M33	S29	42号(95)	A5判	縦組(2,3)	300	0	絵
4	城北	北極星(ほっきょくせい)	S46		23号(95)	A5判	縦組(2,4)	206	8	絵
5	城ノ内	青藍(せいらん)	S55		16号(95)	B5判	縦組(4)	136	6	写真
6	徳島市立	葦芽(あしかび)	S37		34号(95)	B5判	縦組(4,5)	104	16	写真
7	徳島農業	落羽松(らくうしょう)	S30		41号(95)	A5判	縦組(2,3)	108	0	写真
8	徳島農業神山	埴生(はにゅう)	S31		42号(95)	B5判	縦組(4)	55	0	絵
9	徳島工業	たくみ	S31		68号(95)	B5判	縦組(4)	73	8	絵
10	徳島東工業	東風(とうふう)	S49		21号(95)	A5判	縦組(3)	142	0	写真
11	徳島商業	すみよし	S34		42号(95)	A5判	縦組(3)	226	0	絵
12	小松島	松高この一年(まつこうこのいちねん)	S43		28号(95)	A5判	縦組(2,3)	136	0	絵
13	小松島西	松籟(しょうらい)	S50		22号(95)	A5判	縦組(3)	138	2	写真
14	勝浦	たちばな	S40	S63	8号(95)	A5判	縦組(3)	98	0	写真
15	富岡東	唐梅(からうめ)	S51		20号(95)	B5判	縦組(4)	112	8	写真
16	富岡東羽ノ浦	白梅(しらうめ)	H6		3号(95)	B5判	縦組(3)	76	2	写真
17	富岡西	牛岐(うしぎ)	S54		17号(95)	B5判	縦組(3)	220	0	絵
18	阿南工業	青嵐(せいらん)	S38		12号(95)	A5判	縦組(4)	72	0	絵
19	新野	若竹(わかたけ)	S33	H7	(95)	B5判	縦組(4)	77	0	写真、文字
20	那賀	竜峰(りゅうほう)	S58		13号(95)	B5判	横組(1,2)	152	0	絵
21	那賀平谷	三思(さんし)	S28	S50	48号(95)	A5判	縦組(3)	80		写真
22	那賀木頭	若人(わこうど)	S42		30号(95)	A5判	縦組(1)	49	0	写真
23	日和佐	波濤(なみ)	S45		27号(95)	B5判	縦組(2)	210	0	絵、写真
24	海南	黒潮(くろしお)	S44		27号(95)	B5判	縦組(4)	30	0	写真
25	穴喰商業	鈴が峰(すずがみね)	H6		2号(95)	B5判	縦組(4)	34	0	写真
26	鳴門	潮流(ちょうりゅう)	S22	S41	28号(95)	B5判	横組(2,3)	125	8	絵
27	鳴門第一	渦潮(うずしお)	S22	S44	49号(95)	A5判	縦組(4)	129	2	写真
28	鳴門市工業	鳴峽(めいきょう)	S42	S51	18号(95)	B5判	縦組(2,3,4)	90	0	写真
29	板野	板野(いたの)	S52		18号(95)	B5判	縦組(4)	97	4	写真
30	名西	藤波(ふじなみ)	S58		13号(95)	B5判	縦組	97	12	絵
31	鴨島商業	えがわ	S38		33号(95)	B5判	横組	105	2	写真
32	川島	あらたえ	S4	S51	20号(95)	A5判	縦組(2,3)	139	0	写真
33	阿波	粟(あわ)	S55		16号(95)	B5判	縦組(3,4)	110	0	絵、写真、文字
34	阿北	藍流(らんりゅう)	S60		10号(95)	B5判	縦組(2)	139	0	文字
35	阿波商業	土柱(どちゅう)	S38		22号(95)	B5判	縦組(3)	138	0	絵
36	穴吹	華の丘(はなのおか)	S2	S50	21号(95)	B5判	縦組(3)	125	0	写真
37	穴吹木屋平	剣峽(けんきょう)	S49		22号(95)	B5判	縦組(2)	48	0	絵
38	穴吹穴吹	同上(同上)	同上		同上	同上	同上	同上	同上	同上
39	穴吹一字	同上(同上)	同上		同上	同上	同上	同上	同上	同上
40	脇町	芳越(ほうえつ)	S46		59号(95)	A5判	縦組(3)	170	0	絵
41	美馬商業	みま	H1		7号(95)	B5判	縦組(3)	90	0	絵
42	池田	桜陵(おうりょう)	S63		(95)	B5判	縦組(3,4)	140	0	絵
43	池田祖谷	学燈(がくとう)	S26		45号(95)	B5判	横組(2)	52	0	絵
44	三好	みつばがし	S33	S50	38号(95)	B5判	縦横組(3)	140	0	絵
45	聾	やまびこ			2号(61)	A5判	縦組(2,3)	93	0	絵
46	板野養護	やまもも			17号(95)	A5判	縦組(2)	16	1	絵
47	鴨島養護	ひやまじ	S52		19号(95)	B5判	縦組(2)	57	2	絵、文字
48	ひのみね養護	ひのみね	S36		34号(95)	B5判	縦組(2)	88	0	絵、文字



資料番号	作成部課名称	表題	資料年月	
1	G9104011	徳島学院	創立50周年記念誌	1973.12.05
2	G9201988	徳島県立保育専門学院	創立四十周年記念誌	1991.01.20
3	G9203247	農業大学校	開校25周年記念誌	1992.11.04
4	G9000248	徳島県教育委員会	徳島県公立高校の歩み	1972.12.25
5	G9101267	城東高等学校	渭山創立70周年記念誌	1972.11.22
6	G8904146	城東高等学校	二十周年記念誌(内町分校)	1990.01.02
7	G9101288	城東高等学校	働学両全(定時制30年誌)	1980.03.09
8	G9105428	城東高等学校	渭山創立90周年記念特別号	1991.11.16
9	G9501050	城東高等学校	きたじま第21号創立30周年・校舎新築移転記念誌	1995.03.01
10	G9101289	城南高等学校	渦の音22号創立100周年記念号1975年版	1976.03.08
11	G9101310	城南高等学校	創立110周年城南の青春	1985.11.16
12	G9600051	城南高等学校	創立120周年記念式典高津住男氏記念講演	1995.10.26
13	G9105444	城北高等学校	北極星第19号・創立50周年特別記念号	1992.02.28
14	G9101328	城ノ内高等学校	青藍10周年特集	1989.09.08
15	G9501053	徳島農業高等学校	徳島農業高等学校九十周年記念誌	1994.03.27
16	G9200846	徳島農業高等学校	落羽松創立60周年建設竣工記念	1963.11.23
17	G9000243	徳島農業高等学校	徳農神山分校三十年誌	1978.02.15
18	G9101341	徳島工業高等学校	仰星年譜(定時制廃止)	1980.03.01
19	G9101342	徳島工業高等学校	徳工65周年記念誌	1969.10.01
20	G9101347	徳島工業高等学校	たくみに生きむ 創立80周年記念誌	1985.02.01
21	G9101349	徳島東工業高等学校	徳島東工業高校五十年史	1987.11.28
22	G9300137	徳島東工業高等学校	造船科記念誌 平成4年3月	1992.03.31
23	G9101375	徳島商業高等学校	徳商70年史	1980.10.23
24	G9105496	徳島商業高等学校	すみよし第17号創立60周年記念特集号	1970.10.01
25	G9101374	徳島商業高等学校	すみよし特集70周年記念式典	1981.02.21
26	G9101377	徳島商業高等学校	徳島の商業教育100周年記念特集号	1985.04.30
27	G9001917	徳島商業高等学校	創立80周年記念号すみよし	1990.10.31
28	G9001832	徳島中央高等学校	10周年記念誌	1987.11.27
29	G9001834	徳島中央高等学校	定通教育40周年記念誌No.24	1988.03.25
30	G8904178	小松島高等学校	松高四十周年	1972.05.20
31	G9101384	小松島高等学校	五十年誌	1981.11.07
32	G9105516	小松島高等学校	松高60年史	1991.11.28
33	G9101387	小松島西高等学校	創立30周年記念誌松籟特集号	1981.02.10
34	G9101388	小松島西高等学校	創立40周年記念誌特別号松籟第16号	1991.02.19
35	G9101391	勝浦園芸高等学校	10周年記念誌	1974.11.27
36	G8904222	勝浦園芸高等学校	60周年記念誌	1987.05.23
37	G9501002	勝浦園芸高等学校	たちばな第7号創立70周年記念誌	1995.03.02
38	G9101401	富岡東高等学校	70周年記念誌唐梅特集号	1982.11.22
39	G9401399	富岡東高等学校	八十周年記念誌	1992.11.19
40	G9101419	富岡西高等学校	徳島県立富岡西高等学校七十年史序説	1965.11.01
41	G8904246	富岡西高等学校	創立八十周年記念誌	1976.05.15
42	G8904247	富岡西高等学校	富岡西九十周年記念	1986.01.31
43	G9101423	阿南工業高等学校	創立10周年記念誌	1974.03.20
44	G9203193	阿南工業高等学校	青嵐創立30周年特別記念号	1992.11.30
45	G9103216	那賀高等学校	若鮎創立20周年記念	1973.03.01
46	G9101426	那賀高等学校	徳島県立那賀高等学校三十周年記念誌	1982.09.20
47	G9300033	那賀高等学校	三思第45号四十周年記念誌	1993.03.01
48	G9101438	日和佐高等学校	波濤創立50周年記念特集号	1976.10.20
49	G9101439	日和佐高等学校	波濤創立60周年記念特集号	1986.11.10
50	G9101448	水産高等学校	40周年記念誌青雲	1976.10.15
51	G8904282	水産高等学校	青雲・五十周年記念誌	1986.11.15
52	G9101457	海南高等学校	黒潮第4号五十周年記念特集号	1973.02.20
53	G9101451	海南高等学校	徳島県立海南高等学校六十周年記念誌	1983.10.08
54	G9302282	海南高等学校	黒潮第25号70周年記念特集号	1994.03.02
55	G8904288	穴喰商業高等学校	青潮・創立15周年記念	1963.03.31
56	G9101484	鳴門高等学校	1979年度潮流創立70周年記念号	1979.09.01
57	G9001844	鳴門高等学校	潮流創立80周年記念特集号第21号	1989.10.21
58	G9101478	鳴門商業高等学校	渦潮創立70周年記念誌特別号	1983.11.01
59	G9302281	鳴門商業高等学校	渦潮創立80周年記念誌特別号	1993.11.27
60	G9500272	板野高等学校	板野高校七十年史	1976.10.15
61	G9101490	板野高等学校	板野第9号創立80周年記念特集	1986.10.18
62	G9300048	阿波高等学校	粟復刊第13号平成4年度70周年記念	1992.03.03
63	G8904381	阿北高等学校	藍流・創立25周年記念	1971.11.28
64	G8904382	阿北高等学校	藍流・創立35周年記念	1981.11.14
65	G9401089	名西高等学校	70周年記念誌	1993.11.12
66	G8904363	鴨島商業高等学校	十周年記念誌	1968.03.03
67	G8904364	鴨島商業高等学校	二十周年記念誌えがわ15号	1978.02.10
68	G8904365	鴨島商業高等学校	三十周年記念誌	1987.10.31
69	G9300050	鴨島商業高等学校	校誌・えがわ・30号創立三十五周年記念	1993.03.01
70	G9200881	川島高等学校	五十年誌	1975.11.08
71	G9101513	川島高等学校	60周年記念誌	1984.11.08
72	G9501039	川島高等学校	70周年記念誌	1994.11.08
73	G9101518	阿波商業高等学校	20周年記念誌	1978.11.25
74	G9101519	阿波商業高等学校	25周年記念号土柱	1983.03.01
75	G8904390	阿波商業高等学校	創立三十周年記念誌	1988.10.22
76	G9101520	穴吹高等学校	華の丘創立50周年記念	1973.06.22
77	G9101521	穴吹高等学校	華の丘創立60周年記念	1983.11.11
78	G8904437	脇町高等学校	芳越(80年目で見る叙事詩)	1976.11.27
79	G9101535	脇町高等学校	回顧・芳越 創立90周年記念誌	1986.11.15
80	G9602949	脇町高等学校	脇町高校百年史	1996.11.16
81	G9101538	美馬商業高等学校	創立25周年記念誌	1980.11.22
82	G9600067	美馬商業高等学校	1995創立40周年記念誌	1995.11.01
83	G9101543	貞光工業高等学校	二十周年記念誌	1979.11.23
84	G9001833	貞光工業高等学校	30周年記念誌	1989.11.18
85	G9101544	辻高等学校	60年誌	1976.11.30
86	G8904443	辻高等学校	創立70年誌	1986.11.01
87	G9101547	池田高等学校	創立50周年	1972.11.25
88	G9101549	池田高等学校	60周年記念誌	1981.06.20
89	G9101548	池田高等学校	65周年記念誌桜陵	1987.03.09

## 学校の

徳島県の小学校の歴史は、明治四年(一八七二)の藩立小学校から始まる。その後次々と県下に設置され、明治六年に三十一校であった小学校が、二年後には四十六校になった。しかし、そのほとんどが民家や寺院に間借りした施設であった。

小学校の記念誌は、一・二の例を除いて、ほとんどが百年誌(史)である。これは中途の五十年目が戦前で、印刷出版が一般化していない時期によるためだろう。内容

数多くない。五十年を迎える一九九六年(平成八年)度の今年以後に、多くの記念誌が一斉に発行されるものと期待する。高等学校では、旧制中学校以来の百二十年の古い歴史を持つ城南から、戦後に新設されまだ三十数年の歴史しか刻んでいない徳島市立・鳴門工業・阿南工業など多様であり、内容も多彩である。今回の展示ではアルバム型、文集型、史書型、また複合型を合わせて八つのタイプに分類してみた。それぞれの学校の特色が如実に出ていて興味深い。



記念誌

個人・団体を問わず、十年・二十五年と経てきた歴史は二度とくり返すことのない貴重な経験であり、この経験を今後の成長・発展の教訓とするために歴史は記録される。個人の経験は、記憶の中に閉じ込めてあっても必要なきに取れ出すことは必ずしも不可能ではない。しかし組織の経験は記録しない限り全体の知恵とはならない。学校の記念誌もこうした思いから先輩たちによって記録されてきた。

は、沿革史、教職員・卒業生の全氏名、在学生の集合写真と名簿、校舎の見取り図、学校行事の記録、旧職員・卒業生の思い出などが主なものである。比較的新しく設立された小学校では卒業生のすべての集合写真を完備している記念誌も多い。

現在の中学校は、昭和二十二年（一九四七）五月三日、新憲法のもとで県下一斉に発足した。二十年誌（阿南中・神領中・神山中など）、三十年誌（石井中・相生中）などの発行は

資料番号	作成部課名称	表題	資料年月	
90	G 9202861	池田高等学校	70周年記念誌桜陵	1992.11.14
91	G 9105714	三好農林高等学校	三十年誌	1976.05.15
92	G 8904450	三好農林高等学校	四十年誌	1986.05.15
93	G 9101557	盲学校	徳島県盲教育史	1980.03.31
94	G 9105721	盲学校	盲学校理学療法科二十五周年記念誌	1991.03.31
95	G 9600075	盲学校	盲学校理学療法科30周年記念誌	1996.02.20
96	G 9105722	聾学校	義務制25周年記念誌	1973.10.01
97	G 9002585	聾学校	創立50周年記念誌昭和57年度版	1982.11.22
98	G 9001831	板野養護学校	創立二十周年記念誌希望	1984.11.15
99	G 9202448	板野養護学校	創立十周年記念誌(板野分校)	1989.03.01
100	G 9402517	板野養護学校	希望板野養護学校創立30周年記念誌	1995.02.10
101	G 9101573	国府養護学校	10周年記念誌	1984.05.25
102	G 8904467	鴨島養護学校	創立十周年記念誌	1984.12.01
103	G 9400628	鴨島養護学校	創立20周年記念誌	1994.03.31
104	G 9402058	ひのみね養護学校	十周年記念誌ひのみね	1994.10.15
105	G 9101621	徳島市	葦芽創立10周年記念号(徳島市立高等学校)	1972.03.07
106	G 9000257	徳島市	八万校百年史(100年史 八万小学校)	1979.05.01
107	G 9101593	徳島市	創立20周年市高記念論集	1982.09.01
108	G 9101595	徳島市	徳島市立高等学校史(創立10周年誌)	1977.01.20
109	G 9101596	徳島市	徳島市立高等学校史創立20周年誌	1982.09.01
110	G 9101628	徳島市	葦芽20周年記念誌	1982.03.08
111	G 9101589	徳島市	グラフ・年表 市高25年史	1987.09.12
112	G 9101738	徳島市	津田小学校百年の歩み	1973.03.01
113	G 9101741	徳島市	入田小百年	1974.01.10
114	G 9101742	徳島市	至善の百年(国府小学校の歩み)	1975.07.10
115	G 9101744	徳島市	百年の歩み(徳島市川内北小学校)	1973.10.01
116	G 9200679	徳島市	助任小学校の百年	1971.11.15
117	G 9202608	徳島市	徳島市立高等学校30年史	1992.11.28
118	G 9500268	徳島市	加茂名小学校沿革史	1973.03.01
119	G 9500269	徳島市	内町小学校沿革史	1971.06.11
120	G 9101634	鳴門市	10周年記念誌(鳴門市立鳴門工業高校)	1973.03.31
121	G 9500510	鳴門市	堀江北百年誌	1973.11.03
122	G 9200684	鳴門市	百周年記念誌(鳴門市林崎小学校)	1975.03.10
123	G 9209023	鳴門市	くわじま 桑島小学校創立100周年記念	1974.11.04
124	G 9500511	鳴門市	板東小学校百年誌	1975.03.20
125	G 9101635	鳴門市	鳴工新聞総集版20周年記念号	1984.03.31
126	G 9101636	鳴門市	20周年記念誌(鳴門市立鳴門工業高校)	1984.02.28
127	G 9509009	鳴門市	鳴門市板東小学校創立110周年記念誌	1985.03.25
128	G 9200688	小松島市	小松島小学校百年の歩み	1973.11.18
139	G 9001907	阿南市	阿南中学校創立20周年記念	1986.11.20
130	G 9103611	阿南市	加茂谷中学校40周年記念誌	1990.01.31
131	G 9101802	阿南市	宝田小学校創立100周年記念誌	1991.03.20
132	G 9500870	阿南市	阿南市橋小学校創立120周年記念誌	1995.03.31
133	G 9101817	石井町	30年のあゆみ(石井中学校)	1977.11.22
134	G 9101815	石井町	石井小学校百年史	1973.12.01
135	G 9101816	石井町	藍畑小学校百年史	1980.02.25
136	G 9200698	神山町	創立20周年記念教育のあゆみ(神領中学校)	1968.03.31
137	G 9202886	神山町	神領小学校百年史	1973.11.15
138	G 9202887	神山町	広野小学校百年史	1974.12.01
139	G 9202889	神山町	ももとせのあゆみ 阿川小学校百年史	1974.11.01
140	G 9202888	神山町	鬼籠野小学校百年史	1976.03.20
141	G 9202885	神山町	左右内小学校百年史	1981.11.20
142	G 9202890	神山町	下分小学校百年史	1894.10.15
143	G 9101818	神山町	上分小学校百年史	1984.08.01
144	G 9002645	神山町	20周年記念誌青雲寮(神山中学校)	1990.11.27
145	G 9200111	神山町	上分中学校45周年記念誌	1992.03.15
146	G 9600160	那賀川町	創立10周年記念誌(町立今津幼稚園)	1995.12.02
147	G 8904540	相生町	日野谷小学校百周年記念誌	1983.03.06
148	G 9001788	相生町	延野小学校百年史	1983.04.05
159	G 8904539	相生町	西納小学校の百年	1978.11.05
150	G 9602848	相生町	1995創立30周年記念誌 相中のあゆみ	1996.02.29
151	G 9200709	相生町	平野小学校の百年	1975.09.15
152	G 8904538	上那賀町	桜谷小学校百周年記念誌	1983.11.03
153	G 9101834	木頭村	木頭教育百年史	1982.03.31
154	G 9500266	吉野町	一条小学校100年史	1975.04.01
155	G 9200712	鴨島町	鴨島小学校百年	1976.03.01
156	G 9200719	脇町	北校百年(脇町江原北小学校)	1975.02.11
157	G 9200722	半田町	せまくて遠い空だけど(大惣教育80年)	1987.03.23
158	G 9200475	貞光町	母校百年史(貞光小学校)	1974.12.01
159	G 8904541	貞光町	皆瀬小学校百年誌附録寄付者芳名録	1989.01.20
160	G 9101883	山城町	下名小学校百年史	1976.10.31
161	G 9200723	井川町	辻小の歩み創立百年記念誌	1974.03.07
162	G 9101888	東祖谷山村	落合小学校創立百周年記念誌	1990.02.10
163	G 9000244	その他	徳島県高等学校30年史(高等学校長会編)	1979.11.03
164	G 9203613	その他	創立二十周年記念誌(もとしろ保育園)	1983.12.05
165	G 9102172	その他	徳島県高等学校四十年史(徳島県高等学校長協会)	1989.04.30
166	G 9500354	その他	徳島県教育女性史	1989.03.31
167	G 9002591	その他	二十五年の足跡(おおぎ学園)	1982.03.01
168	G 9500267	その他	板野郡中学校10年史	1958.02.11
169	G 9102223	その他	徳島県高等学校野球三十五年史	1983.02.15
170	G 9500353	文部省	徳島大学工学部五十年史	1973.04.15
171	G 9101934	文部省	阿南高専20年誌	1984.03.10
172	G 9102019	文部省	90年史(徳島大学付属幼稚園)	1983.03.13
173	G 9102009	文部省	百年のあゆみ(徳島大学付属小学校)	1975.12.02
174	G 9102008	文部省	付属中学校四十年(鳴門教育大学付属中学校)	1987.10.20
175	G 9102030	文部省	杉の子の十年(鳴門教育大学付属養護学校)	1975.11.15
176	G 9102031	文部省	未来にはばたく杉の子の二十年(鳴門教育大学付属養護学校)	1985.11.22
177	G 9103068	文部省	鳴門教育大学十年史	1991.10.01



## 展示資料目録

資料名	学校名	号数
渭山	城 東	1,24
きたじま	城東北島	1,22
渦の音	城 南	1,42
北極星	城 北	1,23
青藍	城ノ内	1,16
葦芽	徳島市立	1,34
落羽松	徳島農業	1,41
埴生	徳島農業神山	1,42
たくみ	徳島工業	1,68
東風	徳島東工業	1,21
すみよし	徳島商業	1,42
松高この一年	小松島	1,27
松籟	小松島西	1,22
たちばな	勝浦(勝浦園芸)	1,8
唐梅	富岡東	1,20
白梅	富岡東羽ノ浦	1,3
牛岐	富岡西	1,17
青嵐	阿南工業	1,12
若竹	新 野	1
竜峰	那 賀	1,13
三思	那賀平谷	48
若人	那賀木頭	30
校誌 波涛	日和佐	1,25
黒潮	海 南	1,27
鈴が峰	穴喰商業	2
潮流	鳴 門	1,28
渦潮	鳴門第一(鳴門商業)	49
鳴峡	鳴門市立工業	1,18
板野	板 野	1,18
藤波	名 西	1,13
えがわ	鴨島商業	33
あらたえ	川 島	1,20
粟	阿 波	1,16
藍流	阿 北	1,10
土柱	阿波商業	22
華の丘	穴 吹	1,21
剣峡	穴吹(三分校)	22
芳越	脇 町	1,59
みま	美馬商業	1,7
桜陵	池 田	1,H1
学燈	池田祖谷	45
みつばがし	三好(三好農林)	38
やまびこ	馨	2
やまもも	板野養護	17
ひやまじ	鴨島養護	19
ひのみね	ひのみね養護	34
渦のあや	撫養高女	6,24
新興	麻植中	4
而立	阿波高	
後彫	徳島高女	19,26
旧校誌 三好婦人	三好高女	2
開拓	麻植中	
光陵	麻植中	1
若鮎	城北高	
交友会雑誌	板西農蚕学校	22
あらたへ	麻植中	10
緑乃友	板野高	7
10周年記念誌	徳島中央	
40周年記念誌 青雲	水 産	
30周年記念誌	貞光工業	
創立70年誌	辻	
徳島県盲教育史	盲	
創立十周年記念誌	国府養護	
100周年記念誌	徳島文理	

第十三回資料紹介展  
校誌の世界  
— 徳島県下の学校誌 —

平成九年一月二十八日発行

編集・発行 徳島県立文書館  
〒770 徳島市八万町向寺山  
電話 〇八八六(六八)三七〇〇

印刷 原田印刷出版株式会社  
〒770 徳島市西大工町四ノ五  
電話 〇八八六(二二)三三五六